

歴史災害研究部会

部会代表者：文学部・教授 山崎 有恒

部会メンバー：板谷 直子、大窪 健之、片平 博文、高橋 学、中谷 友樹、矢野 桂司、
吉越 昭久

【研究計画の概要】

過去の減災の知恵を抽出し、その知恵を現代の文化遺産防災計画・事業に活かす。具体的には、歴史災害のデータベース化およびGISを援用した地図化などを通じた史資料のアーカイブ化、これを活用した歴史災害の復原による過去の減災の知恵の抽出、および過去の減災の知恵を精査し、現代の最新技術の援用により、現代に活かすことができる知恵への修正と有効性の検証を行う。

(1) 歴史災害を生き延びてきた減災の知恵に関するデータベース構築【○大窪、吉越、中谷、矢野】

国内外の歴史災害を生き延びてきた都市や建築に内在する減災の知恵に関する史資料、文献などを収集し、フォーマットシートに整理して「減災の知恵データベース」を構築する。

2013年度および2014年度は、東日本大震災の被災地の社寺の機能など、国内事例の整理を中心に調査を継続し、その英訳を進めることで、海外でも同様な取り組みを進める可能性を検討した。2015年度は国際調査のテストケースを開始し、海外の歴史都市に残される減災の知恵に関する事例の収集を通して、当該の国際的なデータベースのプロトタイプ作成をめざす。

(2) 歴史災害の復原と減災の知恵の抽出に関する研究【○山崎、吉越、片平、高橋】

京都を中心とする歴史災害の復原研究を実施し、減災の知恵を抽出する研究を推進する。災害考古学の知見に基づき、京都盆地諸河川流域の長期的な水害史を構築するとともに、京都日出新聞をベースに、明治から昭和戦前期を対象とした近代京都災害データベース（記事内容を火災・水害・地震・思想・制度・技術・保険に分類）の作成を進めており、2014年度は「明治後期京都歴史災害データベース」を公開した。2015年度は明治前期の作業を通して、対象期間全体にわたるデータベース作成事業を完了させ、近代化を通しての災害の変化と、それに関連した社会の対応を通して、災害と地域社会の歴史を紐解く。また、年に3回ほど学内外の専門家を招き、成果の検討会である「歴史災害セミナー」を継続的に開催する。

(3) 歴史災害の表現方法とGISによる地図化に関する研究【○矢野、中谷、板谷、高橋、山崎】

歴史災害の効果的な表現方法と地図化によって、歴史災害に関する多様な情報の発信と公開を積極的に進める。2015年度は、東日本大震災の文化財被災地図を基礎とした南海トラフ地震での文化財被災予測など、これまで蓄積した地理空間情報の活用をはかるとともに、歴史都市防災研究所における文化遺産防災のための情報基盤の共有化・情報発信をめざす。また、量的な分析のみならず、東日本大震災被災地の宮城県南三陸町志津川地区を対象に、無形の文化遺産である地域の祭礼について、質的な社会調査を実施し、その成果をGISにより地図化する「記憶地図」に基づいて、被災地社会と祭礼の関係の検討をはかる。

【研究成果】

I. 研究成果の概要

(1) 歴史災害を生き延びてきた減災の知恵に関するデータベース構築

2013 年度および 2014 年度は、東日本大震災の被災地の社寺が果たした防災機能など、国内事例の整理を中心に調査を継続した。併せて国際イコモスの災害危機管理分野の専門家委員会である ICORP のメンバーと共同して、海外でも同様な事例調査を進める準備を行った。2015 年度は国際調査のテストケースを開始し、海外の歴史都市に残される減災の知恵に関する事例の分担収集作業を試行した。同時に 2015 年ネパール・ゴルカ地震の被災地調査を行い、伝統的な中庭空間の災害時利用について実態の把握を行うことで、1934 年地震の際の活用状況との比較を試みた。

(2) 歴史災害の復原と減災の知恵の抽出に関する研究

2013 年度から 2015 年度にかけての 3 年間、基本的には京都地域の歴史災害の復原に取り組んだ。吉越ら地理学を中心とするグループは、災害考古学の知見も交えつつ、京都盆地の諸河川流域を対象とした長期的な水害史を構築した。また山崎が主導し、若手研究者・大学院生らで構成される京都歴史災害史料研究会は、3 年間を通して定期的に活動を続け、2014 年度には京都歴史災害データベース明治後期編を完成させた。

(3) 歴史災害の表現方法と GIS による地図化に関する研究

2013 年度は、東日本大震災の文化財被災地図を中心とした研究成果の整理とその可能性に基づいて、文化財の地理空間情報の課題を整理した。2014 年度は、東日本大震災の文化財被災地図の作成において基礎資料となった国指定文化財等文化遺産 GIS データベースを更新したほか、GIS による被災地の祭礼に関する「記憶地図」研究を開始した。2015 年度は、これらの研究を継続的に発展させ、歴史災害資料の整理と GIS ポータルサイトの充実のほか、各種研究成果の発表を進めた。

II. 研究成果の詳細

(1) 歴史災害を生き延びてきた減災の知恵に関するデータベース構築

2013 年度および 2014 年度は、博士課程前期課程の院生や学部生も含めて、国内事例の整理を中心に調査を継続することで、若手の育成に努めると共に、国連世界防災会議のパブリックフォーラムをはじめ、成果を国際的な研究会議などで発表した。2015 年度は ICORP のメンバーと共に国際調査のテストケースを開始すると共に、ネパール・ゴルカ地震において、伝統的な中庭空間が歴史を超えて災害時活用された実態について調査を行った。

(2) 歴史災害の復原と減災の知恵の抽出に関する研究

2013 年度から 2015 年度にかけての 3 年間、京都地域の歴史災害の復原に取り組んだ。吉越ら地理学を中心とするグループは、災害考古学の知見も交えつつ、京都盆地の諸河川流域を対象とした長期的な水害史を構築した。また山崎が主導し、若手研究者・大学院生らで構成される京都歴史災害史料研究会は、3 年間を通して定期的に活動を続け、2014 年度には京都歴史災害データベース明治後期編を完成させた。これは京都日出新聞をベースに、災害の新聞記事を火災・水害・地震・思想・システム・技術に分類して収録したものであり、今後本研究所のすべての研究活動の基礎データとなるものである。本化グループの研究成果は、各年度の『京都

『歴史災害研究』や歴史都市防災研究所シンポジウム、本プログラム定例研究会などで随時報告、公開してきた。また近代京都歴史災害データベースについては、明治中・後期編、大正期編、昭和戦前期編を歴史都市防災研究所のHPを通じて公開している。2015年度に作成した明治前期編については、現在行っている語句表現の統一、採録記事基準の統一作業が済み次第、HPにて公開する予定である。

(3) 歴史災害の表現方法とGISによる地図化に関する研究

2013年度および2014年度に実施した、東日本大震災の文化財被災地図に関係した文化財のGISデータベース作成・地理的可視化・将来の震災被害推定への応用に関する研究を基に、2015年3月の国連世界防災会議のパブリックフォーラムなど、研究成果の発表を進めてきた。さらに、2015年度には、「歴史都市の防災地理空間情報プロジェクト」と連携して、南海トラフ地震による津波と文化財被災の関係を検討し、登録有形文化財の被災リスクの高さを改めて確認した。文化財の被災リスクに関する地理空間情報の利用の動向や今後の課題について、これまでの研究成果をまとめ、2015年11月に開催された国際会議「文化財防災体制についての国際比較研究」（神戸大学）で発表した。

また、2013年度および2014年度を通して蓄積してきた歴史災害に関する資料類のうち、特に地図や絵図、写真、風景絵画に関するものをスキャニングし、データベース化してきた。2015年度には、アート・リサーチセンターと連携して当該データベースを拡充し、外部に公開する仕組みを整備した。

2014年度に開始した、被災地の祭礼に関する「記憶地図」研究については、2015年3月には、その中間的成果を国連世界防災会議のパブリックフォーラムで発表し、2015年度には論文発表と、現地居住者と討議を重ねて、地域伝承や災害に関連する地域の記憶類を地図化する作業を行った。これらの作業を通して、災害に関する非定型的な情報を地図化する可能性と意義を検討した。

これらの研究活動のいずれにも博士課程後期課程の大学院生および専門研究員が参加し、研究成果の発表にも携わることで、若手研究者の研究成果の蓄積にも一定の貢献を果たした。

Ⅲ. 今後の研究計画・展開

(1) 歴史災害を生き延びてきた減災の知恵に関するデータベース構築

今後も継続して、国内外の歴史災害を生き延びてきた都市や建築に内在する減災の知恵に関する史資料、文献などを収集し、フォーマットシートに整理して「減災の知恵データベース」の構築を目指す。

(2) 歴史災害の復原と減災の知恵の抽出に関する研究

今後も継続して京都盆地地域の水災害の復原研究と、近代京都の歴史災害のデータベース作成の二つを中心に研究を進めていく。前者については個別研究報告を重ねると共に、これまでの成果を踏まえて次年度に大型の科研費を申請し、研究書の刊行を目標に定期的に研究会活動を行っていききたい。また京都歴史災害史料研究会については、今後も継続して近代京都歴史災害データベースの完成に取り組む（残りは明治初年編と昭和戦中期編のみ）。ただし明治初年編については、根幹史料である『京都日出新聞』が未刊行であるため、日本各地の史資料館が所蔵する新聞・雑誌や古文書などから情報を収集していかねばならない。そのため完成にはな

お2年間で要すると思われる。さらに学外より専門家を招いての京都歴史災害研究会活動も継続していきたい。

(3) 歴史災害の表現方法と GIS による地図化に関する研究

歴史災害の効果的な表現方法と地図化に関する、従来の研究活動と情報発信を継続するとともに、地理空間情報を活用する歴史災害研究の新たな可能性として、時間に着目した新たなデータ整理と分析の方法論の開発や、災害に関する質的 GIS 研究などの発展を目指す。